

郡山市民

浩人
理
礼子
母

婚活女子 2 人
タクシー運転手
研究室の学生
パーティー会場の人々
MC
郡山市長
NPO 法人みつばちの会のバイトの光原さん (ミッツ)
よしきくん
同僚
客引き
キャバ嬢
クラブのマネージャー
無名の父親
無名の母親
無名の息子
コンビニの店員

● 駅ナカの喫茶店

浩人、一人でコーヒーを飲んでいる。

うしろの席に女子二人。

女子1 「その人南相馬でちょっと遠いし、あれかなーって思っ

女子2 は、女子1 に向かって反応するが、向こうを向いているので声は全く聞こえない。

女子1 の声のみが響く。

女子1 「あのサイト使うの、男の人はお金かかるんだって。『本気じゃないなら女の人みんなやらなきゃいいのに』とか言われて。ってゆうか私に女の人一般の話されてもだし、ああそうですか、さようですか、としか返せないよね。」

女子2、反応する。

女子1 「で、こっちから返事送る前に向こうからブロックされて、はあ？なんで？ってかおめえそういうところがダメなんだよ、つって。」

女子2、反応する。

女子1 「婚活とかイナカの人って大変だよ〜。わたし郡山以外の街に住むとか考えられ

ないし。向こうからこっちならわかるけど、こっちから向こうって、かなり、ね」

女子2、反応する。

女子1「だって南相馬だよ。あ、でもわたし本宮とか須賀川も大丈夫。近いし。コウイチ君とかツヨシ君が、『オレそっちの方に住むから』っていうなら『あ、はい』ってなるけどアハハ」

女子2、反応する。

女子1「支店長とかになる前って新しい人いれても大丈夫そうないなかに一回行くでしょ。四国とか。それはそれでね、まあ支店長なら、アハハ。」

女子2、反応する。

女子1「一年ぐらいつきあったの？」

女子2、反応する。

女子1「いいなー、わたしもだれかと急展開したーい（両手をあげてバンザイのポーズ）。親戚のおばさんから紹介したい人がいるから来てって電話来て。やだな、最近ほんとにガチ感出てきちゃって。」

女子2、反応する。

女子1「むずかしいよね、ラインとかって文字だし、会ってみないとどんな人かわからないよね。いいな〜、プロポーズされたいなー。結婚したいって言いふらしてる場合じゃないよね。（スマホを見て）あ、まだ負けてる。第3クォーター終わって55対61」

女子2、反応する。

女子1「うーん、でももうすぐ梅雨だし。髪このままでもいいかなって。切るとひろがるでしょ。」

浩人、レジでお金を払ってキャリーケースを引いて出ていく。

ロータリーを横切ってタクシーをひろう。

●タクシー

後ろのトランクに自分で荷物を入れる浩人。

運転手「すみませんね、腰やっちゃって。」

浩人「ああ、いえ。お願いします。開成山公園かいせいざんの向こう側。」

運転手「はい、開成山ね。メーターたおしますね」

タクシー動き出す。

運転手「公園でいいの？」

浩人「公園の向こう側の筋を下がって。文化通りと交わる一つ手前で。」

運転手「はい。向こう側、下がったところ」

タクシー走る。

運転手「今日は暑いねえ。4月だっていうのに、もう夏みたいだよ。」

浩人「そうですね。」

しばらくして

浩人「運転手さん、日大の工学部って、開成山から車でどのくらいですか？」

運転手「そうだね、すいてれば15分、うーん20分ぐらいかな。南側の国道使っていくといいよ。駅前ですとつまっちゃうから。」

●家の前

タクシー到着する。

運転手「1280円。レシートは？」

浩人「はい、ください。」

お金を払う。

運転手「はいどうも。また後ろ、悪いね」

後ろのトランクからまた自分で荷物を出す浩人。

運転手「ありがとー！」

タクシー去る。

浩人、家の鍵を開けて中に入る。

キャリーケースのタイヤを玄関にあった雑巾で軽くふき、自分の部屋に置いてくる。

トイレ。用を足す。

洗面所。手を洗い、うがいをする。

台所。水を飲む。

母の部屋に行く。

眠っている母。

しばらくじっと見ている。

寝返りを打つタイミングで逃げるようにさっと部屋を後にする。

携帯で電話をかける。

浩人「あ、もしもし礼子？今着いた。お母さん？うん、寝てる。今日は仕事？あそう。

じゃ、ちょっと車貸してくれない？大学行ってくる。キーってどこだっけ。ああ、あったあった。はい、じゃあまたあとで。」

靴を履いて家を出る。

狭い駐車場から車を運転して出ていく。

●大学通り

浩人が車を走らせている。

理^{きとし}が反対車線の側の歩道を正門に向かって歩いているのを見つける。

浩人、窓を開けて声をかける。

浩人「理！」

気が付かない。

少し近づいてもう一度声をかける。気が付いた。

振り向いて、道路を横断して浩人の車に近づいてくる。

浩人「おー、ちょっと！なに！乗らない？4号棟の駐車場ってどこ？」

理「ああ」

助手席に乗り込む理。車、発進する。二人とも前を向いたまましゃべる。

浩人「おー、ひさしぶり。元気？」

理「元気だよ。」

浩人「なんだよ。おどろけよ、もっと。」

理「うん。」

浩人「なに、どうしたの」

理「いや、べつに。このあいだもこんなようなことがあってさ、普通もっと驚くのかな。」

浩人「なにが」

理「会うべくして会ってるっていうか、例えば浩人と俺がここで再会するのって、二人とも福島出身の理系の研究者で同世代で、まともな研究機関は福島にはこしかななくて、だから十分ありうるでしょ。それがこのタイミングだったってだけで。」

車は車道から曲がりこんで正門に入る。

浩人「まあ、そうだけど。」

理「だから考え方によっては偶然じゃなくて必然だよ。思ったより行動範囲は狭いもんだよ、人間は。空間的にじゃないよ。つきあう人間の幅っていうか、触れうるソサエティの範囲っていうか。どんなに世界中飛び回ってても、気が付かないうちに出会う人間や状況の範囲をせばめながら生きている。せいぜい^{ほよけ}仏の手のひらで動き回ってる程度で、偶然とやったことでも他から見ればあたりまえじゃん、て感じで再会してることが多いよ。」

浩人「これ、どっち」

理「右。このあいだ東京のユースホステル泊まって朝カフェテリアで作業しながらコーヒー飲んでたら、まわり全部バックパッカーで、そのなかで日本人のバックパッカーの3人組が2週間前にアルゼンチンで会ったイギリス人のバックパッカーのグループとそのホステルで再会して奇跡のような偶然がおこったって感じで喜びあってたけど、あたりまえだろって思ったよ。だってバックパッカーだし。他の客もほとんど全員バックパッカーだったし。それよりそこのカフェテリアで科研費の申請書広げてる郡山の大学勤務のバックパッカーじゃない俺が隣にいることの方が奇跡のような偶然なんじゃないか。せいぜいそんなもんだ。一見偶然と見えることに物語を与えて感動するより、まずは自分の行動範囲や生活様式のバリエーションが実はどれだけ限られたものかを考えてみるべきだと思う。距離と偶然性は関係ないんだ、もはや。」

浩人「じゃあ、わかった。このタイミングに驚いたんだ。俺は。」

理「そうかもしれない…。ありうるすべての可能性にたいして、準備しておく能力を人間はもたないからね。個人としては。ただ1トピックとして浩人との再会を常に念頭に置いて生きていることも不可能ではなかったはずで、その場合はこのタイミングにも偶然を感じることは少なかったはずだ。」

浩人「どうしてそんなに偶然を嫌うんだよ。」

理「きらってないよ。偏在している偶然性に気が付かないことが多すぎると言っているだけだ」

浩人「まあそうか」

理「ある出来事を偶然ととらえるのは場合によってはある種の思考停止なんだ。その隙間

にいま、いろいろなものが入り込んできている」

バックして車庫入れ。

理「時間ある？」

浩人「今何時？」

理「1時15分。」

浩人「いいよ。」

理「このあとは？」

浩人「2時から打ち合わせ。」

理「情報工学の研究室で使ってるモデルハウス見てよ」

浩人「ああ。モデルハウス。」

理「疑似体験で防災できるかって実験。震災当日に起こった出来事を当事者にヒアリングして、彼らと一緒に追体験するシステム。」

車から出て大学構内を徒歩で移動する。

理「郡山は？共同開発？」

浩人「そう。仙台の国家戦略特区に建てるビルごと再生可能エネルギーの実験台にする話。モックアップをここでしてデータとってこいって。けど、しばらく東京離れられてよかったよ」

理「いまは？実家？」

浩人「そう。戻った。」

●モデルハウスのある研究棟

大学の建物に囲まれた中庭のような場所にモデルハウスが一軒建ててある。

学生がすでにいる。

学生「おつかれさまです」

理「こちら、産学連携の松下先生」

浩人「どうも、はじめまして。」

学生「こんにちは」

理「ちょっとだけ見学するから」

学生「あ、はい」

浩人、理にVR機器を装着してもらい、少し体を動かしてみる。メガネを触って確かめる。

浩人「こんなかんじ？」

理「合わせるからちょっとまって。この部屋とおんなじ間取りでしょ？」

浩人「うん。なんか変な感じ。」

理「正面の柱、まっすぐ見て」

理はパソコンで数値を調整している。

浩人「ああ、あれね。(指さした自分の手がみえず) おー。自分の体ってみえないんだ。あたりまえか。」

理「動かせるものはセンサーはいつてるから、中でも動く」

浩人「あ、はい」

ひとしきりふわふわと動き回る浩人。

椅子を確かめて動かしたり座ったりする。

たちどまり、ながめてから

浩人「あ、風が吹いてる。…窓の、カーテンがゆれてる。ここは？」

理「国道ずっと東にいった海岸沿いの家。いまはもうないけど。つけるよ」

浩人にヘッドフォンを装着する。

ゆっくりあるきまわる浩人。ながめる。

突然、背後から現れたものにおどろいてよける。

しばらくその挙動を見つめている。

前方から自分に向かってくるものに対して身をかかわす。

浩人「あ、すみません。」

目で人の動きを追う。

VRの中で別な人物が、キッチンから庭に園芸用品を運び出している。

浩人に騒がせていることを詫びながら運び出す人物。

浩人「いえ、大丈夫です。」

浩人に椅子に座っているように勧める人物。

浩人「はい、ありがとうございます。」

座る浩人。人物の運び出し行為をしばらく目で追っている。

黙って立ち上がり、窓際まで行く。

閉じかかったカーテンを完全に開けて、タッセルでおさえる。

外の庭で園芸の土を掘り返して新しい土を入れている当事者を見る。

戻って、キッチンへ。火がついて、ふたが空いたままのヤカンの火を止め、蓋を閉める。

キッチンから出て、本棚の本のラインナップを確かめ、一冊手に取って開いてみる。

少し読んで、棚に戻す。

壁づたいに移動し、写真をみつけて、立ち止まる。

すべて確信を持った、落ち着いた動きに見える。

●ホテルのパーティー会場

白いクロスのかかった立食式の丸テーブルが点々とおかれている。

壁際にはブッフェ台とドリンクサービスバーがある。

スーツ姿の中老年男性 300 人ほどが、丸テーブルをそれぞれに囲みながら手にグラスをもつて壇上を見ながら待機している。

浩人もいる。

MC「それではみなさま、乾杯のご発声は、郡山市長永田栄一様でございます。永田様よろしくおねがいたします。」

市長、金屏風側に向かって一礼する。

壇上で人々に一礼する。

郡山市長「ただいまご紹介にあずかりました郡山市の市長を務めさせていただいております永田栄一でございます。皆さま、本日は全日本緑化協会東北支部年次総会の開会おめでとうございます。震災から7年、復興の言葉も昨今違った響きに聞こえてまいりました。よりサステイナブルな持続性のある社会を目指して、益々、緑化事業および再生可能エネルギー事業に関わる皆さまのご活躍を期待しております。

郡山市では、皆さまの事業開発、そして技術力、能力を、存分に、発揮していただく環境を整えております。郡山中央スマートインターチェンジ整備事業を市内5か所で進めており、中央工業団地に続いて、市内交通至便の第一工業団地の分譲もスタートしました。東京まで新幹線でたったの70分。ぜひ、この郡山を今後拠点としていただいて、まだの方は市役所に電話していただければ、職員がいつでもご案内いたしますので(会場ざわめき笑)、どんどん視察していただいて、この郡山に拠点を置くことをご検討いただければと考えております。また、郡山だけではなく、東北、そしてこの日本が一丸にっぽんとなって、東京オリンピックをこえて新しい時代への架け橋を築いていけるよう、努力してまいりますので、どうか皆様方、お力添えのほどよろしく願いいたします。それでは、あまり長くなるとお手持ちのビールがぬるくなりますので、いかせていただきます。おねがいします。では、乾杯！」

皆「乾杯！」

皆、グラスを飲み干す。拍手。

300人のうごめきがはじまる。

各自飲み物を片手に、横の人と歓談をはじめたり、名刺交換の相手をさがして人波をすばやく縫い歩いたりする。

相手を物色する。

名刺を交換し、頭を下げて、隣の人を紹介しあう。

歓談している人の横をわざとらしく通りかかって、今気が付いたかのように振り向いて世間話を始める。

しばしうごめきがつづく。

●家

礼子が横になっている母を見ている。

母、寝返りを打つ。

礼子「お母さん、リンゴたべる？ジュースにしようか？」

母、起き上がろうとする。礼子、ベッドの上半身を電動で傾けて、母が立ち上がるのを促す。

二人でキッチンへ移動する。

キッチン。

礼子「リンゴあるよ。」

母は聞こえない。キッチンとダイニングテーブルを往復して、お茶の準備をする。
認知症で運んだものを忘れたり、とりに戻ったり動作に繰り返が多い。

そのまま独自の世界に則った動きの流れが止まることはない。

礼子「お母さん、あしたお豆のカレーでもいい？ あ、ゴボウもあった、そうしよう。」

礼子、母の動きをよけながら、洗っておいた皿を片付ける。

母がテーブルにつく。

礼子、あとから横に座って一緒にお茶をする。

同じテーブルについているが、コミュニケーションは全くない。

母はテレビをみはじめる。

礼子「えー、明日雨ふるんだー。(リモコンで詳細情報を表示させる) デイケアまでうちの車で一緒にいっちゃお。」

浩人が帰ってくる。

車をバックで狭い駐車スペースにとめる。

礼子「あ、お兄ちゃん帰ってきた。」

浩人、リビングに顔を見せる。

礼子「おかえりー」

浩人「はい、これでよかった？」

スーパーの袋ごと受け取って中を見る礼子。

礼子「あ、そうそう。まさにこれ。ははは、よくわかったね。間違えてつややかふんわり
のほう買ってくるかとおもった」

浩人「なんだよ、それ」

礼子「最近つややかふんわりしか置いてないときあるんだよ」

浩人、トイレ、手洗いうがい、水飲みのルーティンをこなす。

礼子、袋をもって部屋を出ていく。

礼子、浩人のところにくる。

礼子「部屋、大丈夫？」

浩人「え、ああ。大丈夫もなにも元通りになっただけだし。」

礼子「あそう、ならよかった。お母さんにジュースつくってあげて。リンゴ置いとくから」

礼子バスルームに行つてシャンプーを詰め替えている。

浩人、母の挙動をしばらく見ている。

再び立ち上がりキッチンで冷蔵庫を開けてみている母。

浩人「お母さん」

うろつく母親をながめている浩人。

浩人「お母さん、リンゴジュース飲もうか。」

反応はない。母、テーブルに戻る。

浩人、同じテーブルに座って新聞を読み始める。

しばらくテレビを見ていた母親、立ち上がって台所からリンゴと皿とナイフを運んでくる。よろめいて皿から落とす。リンゴが転がる。

よたよたと老体がひろいに行くところを見ている浩人。キャビネットの下に転がり込み、うまく手が伸ばせず膝をついて四つん這いになっている母。浩人、見ているが手伝わない。

母、リンゴを拾ってきて、テーブルでナイフを使ってむきはじめる。

急にはっきりとした挙動で目的がよくわかるようになる。

横にいる浩人とも、人としての関係を保った動き方になり、目線にも意味が生まれる。

ひと切れずつ、むけていく。

むいたものを浩人の前の皿に入れる。

母「食べな」

浩人、食べない。

母、いくつかむいて入れたあとに、食べるようにうながす。

母「なんだよ、いらないのか？」

食べる浩人。

●デイケアセンターの前 翌朝

母を車の後ろからおろして、センターの人に預ける礼子。雨が降っている。

浩人も横で傘をさして見ている。

礼子「じゃ、よろしくおねがいします。」

センターの人「はい、いってらっしゃい。」

浩人「はい。また後程、よろしくおねがいします。」

車に乗り込む二人。

●車の中

礼子が運転している。助手席に浩人。

浩人「お母さん、最近ずっとあんな感じ？」

礼子「そうだね。」

浩人「なんか悪かったな。やらせっぱなしで。」

礼子「別に。悪くはないでしょ。」

車が交差点を右折する。

浩人「お父さんが具合悪いつてこと、もう伝えた？」

礼子「まだ。っていうかもう言えないかも」

浩人「いってもわかんないか」

礼子「いや、そうじゃなくて、おばさんから聞いた。むかし別れた理由。」

浩人「なんて？」

車を止める礼子。

浩人「浮気じゃないのか。」

礼子「ちょっとまって。(車サイドブレーキかける) 違う、浮気じゃない、たぶん。あのさ、小学校のころ、学校の屋上から足滑らせて転落死した女の子の幽霊がいて、夜中にみんなの上履き盗むってうわさ話、覚えてる？」

浩人「覚えてる。盗まれた子は近いうちに死ぬとかいって騒いでたね。」

礼子「その女の子、お父さんだった。」

浩人「…」

礼子「パラフィリアだったって、お父さん」

浩人「なにそれ」

礼子「異常性愛。フェティシズムみたいなもんだと思う。自分のロッカーに上履きたくさん隠してたんだって。」

浩人「子供の？」

礼子「そう。放課後にかくれんぼしてて、先生たちの着替える部屋のロッカーに隠れた子がいて、それでわかったって。お母さん教頭先生に呼び出されて。いろいろ聞かれたんだって。」

浩人「あなたの旦那はパラフィリアじゃないですかって？」

礼子「まあ、そんなもんだよね。どう答えたかは知らないよ。おばさんの話だもん」

浩人「けど、よりによって学校のロッカーにかくすか？」

礼子「家に持って帰ってくるわけにいかないし。他になかったんでしょう。置き場所が」

浩人「ふーん。それで、その大量の上履きで何するの？」

礼子「性的な興奮を覚えるんだよ」

浩人「…」

礼子「お父さん、どうしてたのかな」

浩人「上履きで？」

礼子「ちがう。私たちと別れたあと、そのことお父さん一人でどうしてたんだろ、って」

礼子、車を再び走らせる。

浩人「治療とか受けたんじゃないのか。」

礼子「だったらいいけど。20年以上前の話だからね。そんなケア受けてないかもよ」

浩人「俺が小学5年の時に別れたんだから、…自分の子供が通ってる学校でやってたわけか」

礼子「そういうことになるね」

浩人「で、別れたと。」

礼子「あれから、ずっと一人でそのまま、だれかの上履きを追い求め続けたのかな。」

浩人「実際、罪としてはたくさんの児童の上履きを盗んだ窃盗ってこと？」

礼子「じゃない？ けど、学校側も示談にしたらしいよ。盗んだものも出てきたしね」

浩人「なるほど。ほかになんかなかったの。」

礼子「なに、被害とか？」

浩人「うん。」

礼子「どうかな。あるかもしれないけど、もうわからないよ。」

浩人「ふーん。お母さん、そのこと話し合ったのかな」

礼子「私もそれ思った。でも、ないだろうな。難しいとおもう。」

浩人「そうだね。」

車は街を走る。交差点を曲がる。

浩人「お父さん、胃ガン、だいぶ悪いよ。」

礼子「うん、知ってる」

浩人「すごいやせてて。見た目別人すぎてショック受けなかった。別人にお父さんっていわなきゃいけない、みたいな変な感じ」

礼子「ああ、わかる。ガンってそうなるよね。だれ？みたいな」

浩人「うん、違いすぎて…。でもやっぱり動くときの顔の角度とか、声の出しかたとか、ときどきお父さんそのものみたいな片鱗が、こう、なんていうか表面に、現れては消えた。」

礼子「うん」

浩人「向こうの病院いつ行けるか、あとで教えて。早めの方がいいと思う。」

礼子「わかった」

車がNPO 法人みつばちの会に到着する。

礼子、車から降りる。傘をさす。

浩人「じゃあ、借りるね。」

礼子「うん。」

浩人「行ってらっしゃい。」

浩人、車に乗って去る。

礼子「はーい」

礼子、事務所へ。

●NPO 法人みつばちの会

一階は下駄箱があり、あがるとカーペットが敷かれた託児所と学習塾の間のようなつくりになっている8畳間。横につながる6畳の事務所に3つデスクが狭々と並んでいる。

さらに奥に台所があって、大人数の食事の準備が進んでいる。

礼子「おはよー。」

8畳間に子供が一人いる。

礼子「あれ、よしきくん。おはよう」

バイトの光原さん「今日は学校もおうちもいやだつて。」

礼子「そっか。朝ごはん食べた？」

よしきくん、首を横に振る。

礼子「まだあ？じゃあヨーグルト食べる？」

よしきくん、首を横に振る。

礼子「おなか減ってないのか。じゃあ、光原さんと一緒にみんなの晩ごはん作ろうか。(もじもじするよしきくん) そうたくんも、ひなちゃんも夕方みんなよしきくんの作ったごはん食べるんだよ。すごいね、おいしいねって。」

よしきくん、首を縦に振る。

礼子「よし！じゃ、手洗って、台所いっておいで。偉いね」

光原さん「(礼子に) さすが」

礼子無反応。

光原さんとよしきくん、キッチンへ。

電話がなる。

礼子「おはようございます。NPO 法人みつばちの会です。配達的时间？ええ、この雨ですからね。3時までならいいですよ。それ以降だとちょっと。みんな帰ってきちゃうから。はい、すいませーん。おねがいしまーす。」

礼子、パソコンを立ち上げながら

礼子「ミッツ、今日の買い出し伝票ある？」

光原さん、聞こえない。

礼子、探しながら台所に近づいて

礼子「伝票、もしかしてまたもらうの忘れたの？」

光原さん「あ、はい。そこに。」

礼子「え」

振り向いてデスクの上を見る。

礼子「ああ、ごめん。見えなかった。」

パソコンに打ち込んでいく。

光原さん、戻ってくる。

光原さん「礼子、私、来月ゴールデンウィーク、学校休みだから、こっちにこれるけど。」

礼子「あ、ほんとに。助かる」

光原さん、投げキス。

礼子「昨日、駅前のエスパルにいた？」

光原さん「え、うん」

礼子「あれ、弟さん？」

光原さん「え、いや、うん。あ、いたんだ。気づかなかった」

光原さん、去る。

光原さん「よしきー、手、洗えた？」

●大学のカンファレンス会場

会議が終わって、がらんとした 500 席ほどあるカンファレンス会場。

浩人と同僚が二人だけで残っている。

パワーポイントで巨大なスクリーンを見ながら、適当な座席にいいかげんな姿勢で座ったり、移動したりしながら時々レーザーポインタをスクリーンにあてたり、ページを送ったりしている。

同僚「竣工予定は 2025 年、か」

浩人「結局、こういう都市部のテナントビルだとバイオマスか太陽光しか可能性はないですよ」

同僚「まあ、風力とか効率よく蓄電してもってこれればいいけど。基本は水素もってきて発電かな。蓄電のパターンも一回試してみたいですけどね」

浩人「だしてみたら？」

同僚「ええ。(スクリーンで地図を見ながら) こう見ると…、山際にある地下鉄の駅前だから、なんかできそうなんだけど。いつそのこと送電しちゃうとか。」

浩人「えー、福島から、仙台まで？うーん…。塩害クリアできる太陽光パネルができればな。技術開発からできないかな」

同僚「こーゆーふーに(スクリーンを遠くからレーザーポインタでなぞる) 福島第一太陽光発電所。海岸全部太陽光パネル」

浩人「こーゆーふーに(スクリーンを遠くからレーザーポインタでなぞる) ね。まあ、むずかしいだろうけど。国が考えているのはそういうことだよね。」

同僚「(振り返って、ドアの向こうから警備員が声かけているらしい) あ、すいませーん。今出まーす」

出ていく二人。

●理の研究室 モデルハウス

VRの中に入っている学生。パソコンで確認する理。

学生、電気をつける、窓を開ける。

当事者がキッチンで高い棚に手が届かない様子を見つける。

学生「あ」椅子をキッチンへ運ぶ。

学生「ここでいいですか？」当事者が椅子にのって、高い棚の中から梅酒の瓶を持ち出す。

椅子をおさえて下から見上げている学生。降りてくる当事者。椅子をもとにもどす学生。

当事者、瓶をあけて中を改めている。

学生、テーブルの戻した椅子に座る。当事者が梅酒を学生に勧める。

学生「あ、いえ、いいです、私は。」遠慮がちに顔の前で手を振る。

当事者が窓の外に生えている庭の梅の木を指し示している。

学生「え、じゃあ、私やります」

レードルで梅酒をコップに注いでいく学生。

学生「はい。どうぞ」

座って飲む。

学生「あ？」椅子につかまってしばらく動けない。

学生「…大丈夫ですか？」揺れが来た。

あたりをしきりに見回して、うごけないなりに当事者を探す学生。

学生「大丈夫ですか！もしもーし！大丈夫ですか！どこにいますか！」

ゆっくりと壁づたいに探して回る。

学生「もしもーし！…もしもーし！」

●葬儀場

浩人が焼香をして手を合わせ、挨拶をして出ていく。

礼子が焼香をして手を合わせ、挨拶をして出ていく。

●駅ナカの喫茶店

クラブのマネージャーと、客引きの男子と、出稼ぎのキャバ嬢がお茶している。

生活感がただよう安らかな会話。

客引き「いや、まじで、そんなときは80代のお客さんで、ほんと介護みたいな感じっすよ」

キャバ嬢「あー、あるある」

客引き「ああゆうの、どうしてんすか？」

キャバ嬢「まあ、それなりに飲んでってもらって。静かだし、ウチはけっこう好き。」

客引き「好き？まじか。けど正直怖くないっすか？夜中の2時とか、このひとタクシーのせた後、車おりてから玄関までの5メートル、自力でたどりつけるのかよ？ってレベルっすよ。テーブルでもこんなだし」

客引き、震える手でお冷のグラスをもって再現する。

3人笑っている。

マネージャー「まじかよ、そんなん。飲めないじゃん。」

浩人がキャリーケースを引いて入ってくる。

客引き「まじですって。これですっぺん越えても飲んでるし。年金とかで来てんのかな。」

キャバ嬢「でしょ。あと補助金？」

マネージャー「ああ、でもあるある。ジャマハルで客引きしてたとき、車いすのお客さんでさ、いっしょうけんめいつれてきたお客さんだから何とかしようってなって、オレとトシヤで」

キャバ嬢と客引き、笑う。

マネージャー「シーバーで報告しないでトシヤと二人でとにかくエレベーターのせて」

客引き「無断で？」

マネージャー「そう、上についてエレベーターががーってあいたらイッキがいつも通り頭下げて90度お辞儀状態で待ってて、顔上げて俺ら見て完全フリーズ。」

3人ひとしきり爆笑。

マネージャー「あとでマジ怒られた。こんなの連れてくんよっつって。アハハ。で、ジャマハルって、エントランスのそこ、スロープやろ。」

キャバ嬢「うん」

マネージャー「で、これどうすんのっつって。車いす押してもあがんないの。そのころさ、スロープにめっちゃふっかふかの絨毯がしきつめてあって。お客さん太ってて。トシヤと俺でこんななって。イッキもバックから段ボールもってきてタイヤの下にしいて、段ボールの長さ分進んだら次の段ボール後ろから外して前にしいてローテーション。めっちゃ進んだ」

キャバ嬢「なんのチームやねん」

マネージャー「スロープなんだからユニバーサルにしとけっつーの」

3人、笑っている。煙草に火をつけるマネージャー。

マネージャー「こっちもどつてくると、やっぱ東京の方がいいなって思う。仕事おわっても行くところなくて」

客引き「ティアズいきました？」

マネージャー「いってない」

客引き「シャンパンタワー2つあるんすよ。」

マネージャー「へー」

キャバ嬢「その店、ひなちゃんって子がいて、ウチと同年で元フェラーリでナンバーワンで、そういうの聞くとウチ、メンヘラだからダメになっちゃって。」

客引き「ツバサと組んで群馬行ってた子？」

キャバ嬢「そう、かな？」

客引き「最近稼げてます？」

キャバ嬢「日中出るってなったら3時間ぐらいしか出れないし、早く起きても、10時とか？で起きても、11時半ぐらいに家出て。けど、5時には店やってなきやだし。」

客引き「そっか」

キャバ嬢「急にとかだと、あれだから」

客引き「時期もありますもんね」

マネージャーの電話が鳴る。

マネージャー「了解です。」

マネージャー出ていく。

キャバ嬢「その子、カレシがいて、毎月9万送ってたけど何もなしで。携帯代も払えないみたい。」

客引き「え、だれ？」

キャバ嬢「元フェラーリの」

客引き「ああ、」

キャバ嬢「ウチもカレシあれだからやばってなって、何件かまわって稼ごうかと思ったけど、このへん知らない店だから、今も。全然わかんなくて。」

客引き「かけもちめんどくさいっすよ。オレもキャバとかあんまりわかんないし。」

キャバ嬢「嘘つけよ。でもアクアって基本出稼ぎだし。神奈川いたときも、福島って、業界けっこうアツくって、いきます？ってそんなとき好きだった会津の人に言われて。私も会津だし、行きますって言って。」

客引き「猪苗代は会津ではないでしょ。」

キャバ嬢「そっか。ウチのカレシさ、あいつ仕事なくても結局国からお金はいるから、全然平気みたい。仕事しないで暇なのになんにも考えてないよ。ラッキーぐらいな感じ。いまだに。やばいっしょ？」

客引き「危機感は？みたいな？」

キャバ嬢「そうそう。そっちは？ちよいちよい会ってる？」

客引き「スレチガイ」

キャバ嬢「あそう。ウチあいつとより戻すってなって、こっちもどってきたけど女子供いるから。一家で仮設で落ち着いてんの。」

客引き「ふーん」

キャバ嬢「連絡は毎日してる」

マネージャーが急いで戻ってくる。

マネージャー「事務所すぐそこ？」

客引き「あ、はい」

バタバタと出ていく3人。

浩人、一人残っている。

●大学 ミーティングルーム

夜。同僚と浩人、別々な方を向いたデスクでそれぞれに仕事をしている。

同僚が帰る準備をし始める。

浩人「柏原さん、帰った？」

同僚「ええ、駅前でかつ丼食いたいから今日はもう帰るって。7時ごろかな。ざっくりこんな感じですか、今日のところは。もういい時間ですよ」

浩人「そうね。助成金の枠、とりあえず申請書、下書き送っておいた。」

同僚「あ、はい、確認しておきます。あ、セキュリティ、登録しないと」

浩人「そうだった、今頃悪いね」

構内を歩く浩人と同僚。

同僚「僕ら学生のころ、こんなキャンパス想像つかなかったですよ」

浩人「そうね。おもてなし感があるなあ、最近の大学は」

同僚「学生に対して。ははは。相当管理されて、大学ってこんなんだったっけ、ってよく思います。バカやって限界知るみたいな、モラトリアムっていうんですか。あれはあれで必要だと思うんだけどな。いまの学生みてる则会社員みたいなんですよ。いつも気づかいしてて、やることに無駄がなくて。たまにアホなやつ見つけると安心しますよ、逆に。」

浩人「僕らもそう思われてるんだろうね」

同僚「え？」

浩人「あんなに管理統制を従順に受け入れる研究者とか教員、いなかったよって。」

同僚「まあそうかもしれませんね。」

セキュリティ認証の場所に到着。

同僚「ここ。指紋認証になってて。ここ指置いてもらっていいですか」

浩人「あ、はい。」

指をかざす。

同僚がピピピとやる。

同僚「一回離してください。」

同僚、自分の指紋を読み込ませる。またピピピとやる。

同僚「もう一回いいですか？」

浩人「あ、はい。あ、開いた」

同僚「大丈夫ですね。これでどこのドアでも開きますから。」

浩人「はい、なんか悪かったね。やってもらっちゃって。」

同僚「いえ、じゃあ、また明日。おねがいします。あ、来週、大熊町の開発地区、見学ですよ。」

浩人「あ、そうか」

同僚「研究室の車、予約しておきます」

浩人「ありがとう」

同僚「じゃ」

浩人「おつかれ」

同僚とは別な方向に去る浩人。廊下の窓からモデルハウスを遠巻きに眺めて足を止める。電気がついていて理らしき人が動いている。

同僚が去っていき、廊下の角に消えるのを見ている浩人。

●モデルハウス

浩人、理が一人でVRメガネをつけて動いているのを外から窓越しに見ている。しばらくしてモデルハウスに近づいていく。

モデルハウスに入る。

メガネとヘッドフォンをつけて動いている理。

PCの位置に立って、様子を見ている浩人。

理「あ、大丈夫？」椅子をキッチンへ移動して、おさえる。のっている人を見上げる。椅子を元の位置に戻し、自分も座る。

理「注ぎますよ」

レードルで梅酒をつぐ。

キッチンに行って、追加のコップを持ってくる。

ついだものを当事者に渡す。

理「はい」

理「あ、これ。うん。確かに。懐かしい。」

理「ゆれてる？」

しばらく座って前を向いていたところから急に立ち上がる。

(VR内の映像で地震発生。)理は直立したまま周りをゆっくり見渡す。

状況をながめながら近づいてきて、理の目の前、至近に立つ浩人。

二人が見つめあっているように見える。しばらくそのまま。

が突然、理、脱力してぱったりと倒れる。動かない。動く気がない。

理が倒れているところを間近に歩み寄って、立ったまま見ている浩人。

浩人、しばらくなにもしない。死体のように倒れている理。

やにわに理のVR装置をはずしてのぞき込む。

理「あ、浩人。大丈夫？」

浩人「そっちだろ。大丈夫じゃないのは。水浸しだ。」

理「そうだね。」

浩人「飲んでるのか」

理「ちがうよ。」

大丈夫そうな理、ぱっと起き上がって汗を拭く。

浩人「俺帰るよ」

理「ああ」

浩人、出ていく。

少し進んで振り向くと、理が虚空を見て立ち尽くしている。

そのまま出ていく浩人。

●家

母と浩人がテーブルに向かい合って座っている。

母はテレビの方向を見ているために、浩人とは体は向き合っているが視線は合っていない。

浩人「お母さん、お父さん死んだよ、先週」

母「浩人にはしっかりしてもらわないと。」

母、浩人に向かって話し出す。

浩人「…」

母「浩人にはしっかりしてもらわないと。とにかくあの子は鈍いから。他と比べて。学校でもそうでしょう？」

浩人「…」

母「浩人の中学だけど、郡山の中高一貫校にしようと思ってます。」

浩人「…」

礼子入ってくる。キッチンの方で会話を聞いている。

母「授業料はかかるけど。浩人は公立の中学でて高校受験で高いところ狙える子じゃないから。でもいい大学はでておかないと、これから。」

浩人「…」

母「行く場所で、つきあう人間は変わるの。塾のお母さんたちと学校のお母さんたちと、全然人種が違うのよ。どんどん周りのレベルに差が出て、大学はいったころには、付き合い友達レベルも全然変わる。」

浩人「…」

母「通学、片道2時間。やっぱり負担になるから、郡山に越そうかと思って。いわきには合うところがないから。」

浩人「…」

母「今、看護師はどこも足りてないし。このあいだ一つ、面接行ってきたら、いつでも来てくれたら助かるって。礼子と3人で、どうにかかります。」

浩人「…」

母「もうむこうで私は私でやるし。大丈夫だから。いろいろ、ありがとうございました。」

浩人「お母さん、お父さん死んだよ、先週」

母「浩人。」

浩人「…」

母「アイスクリーム買っておいたよ、食べる？」

冷蔵庫の方へ行く母。

母「イチゴ？チョコレート？あ、バニラがもうない」

浩人「…」

母「どっちがいい？」

浩人「…」

母「なに、どっちよ？もう一個ずつしかないよ。どっちがいいの？」

浩人「…」

礼子「お母さんは？どっちがいいの？」

母「私はどっちでもいいよ」

礼子「どっちでもよくないでしょう。イチゴが好きなんですよ」

母「なに？」

礼子「いつもイチゴとっておいてって言うでしょう。あったらイチゴから先に食べるでしょう。」

母「そんなことないよ」

礼子「あるよ。そうだよ」

母「なによ。変な子。」

礼子「…」

母「もういいよ」

礼子「どうして？自分の好きな方をいったらいいのに。どうしてお兄ちゃんがいるとそうなるの？お父さんの時もそうだったの？」

母「もういいよ！」

礼子「ずっと嫌だったんだよ。そういうのが」

母、テーブルに戻る。

しばらく座っているが、自分でゆっくり部屋へ戻る。

浩人も一緒についていく。

母の部屋。

母を寝かせて布団をかける浩人。

キッチンには礼子がいる。

●タリーズ

礼子「ずっと一緒にいるのに、子供まで二人もつくって、そういうこと話さないってあるのかな」

光原「あるよ。そんなもんだよ、ほとんどみんな」

礼子「そうなの。だって夫婦だよ」

光原「そうだよ。夫婦だってそうだよ。礼子がガツとくるタイプだから、そう思わないだけ。世の中みんなそんなもんだよ。本当に向き合うべき時に向き合える人は結構少ないと思う。」

礼子「ふーん。」

光原「納得してない」

礼子「うん、してない。まあ、わかるけど、ちょっと言いにくいとか、エネルギー使うってことは、そりゃそうだけど。けど、そこまでのことに対して向き合わないのはありえない。」

光原「うーん、なんていうか、そこまでのことだからむしろ向き合わないんだよ。そもそも重要視していることが、ものごとの本質の追求とかじゃなくて、表面上の変化のなさだ

ったりするから、普通の人、みんな」

礼子「…そっか、…言葉を失う」

光原「うん、そんな、もんだよ」

礼子「…もしそうだったら非常に脱力する。」

光原「しょうがないじゃん。それでもみんな、それなりに各々の幸せを追い求めているんだよ。」

礼子「図々しいな」

光原「そうかな。それはそれで一つの価値観だよ。」

礼子「腹が立つよ。避けて通れるもんじゃないよ、自分の旦那が子供の上履き盗んでるとか、あんたが駅前で男と浮気してるとか。」

光原「だからちがうって。」

礼子「ちがってもいい。私は向き合ってる。少なくとも話し合ってる。」

光原「そうだね…。」

他の会話を聞く。

光原「人の弱さを受け入れられないんだ。礼子は。」

礼子「…」

光原「図々しいよ」

光原、笑う。

礼子「確かに。そうかもしれない。」

光原「うん」

礼子「そうだ、そのとおり。受け入れられない。」

光原「わかるよ、それでいいよ。そういう人が持つてる役割もあるさ、世の中には。新しいことをして時代を前に進めるのはきっとそういう人なんだよ」

礼子「うん。…でもそういわれると自信なくなってきた。」

しおれる礼子。

礼子「申し訳なくなってきた。とても申し訳ない」

光原「なにが」

礼子「自分の弱さを棚にあげて、人の弱さを無視してきたから。」

光原「そうやって大人になるんだよ」

礼子「そっか、…けどなんか腹立つ、その言い方」

光原「はいはい」

===

(上の会話と同じ空間で、下の会話も進行する。)

父、母、中学生ぐらいの息子ひとりが小さな丸テーブルを囲んで座っている。

父と母は、コーヒーとケーキをいただいている。

息子はお冷のコップを前に、座ったまま何もしないで、ただ遠くをながめている。

母が3人分の水を、ピッチャーがある台と往復しながらそそくさと足していく。

息子、動かない。

父はケーキを食べている。

母「それどう？」

父「うん、ブルーベリー」

母「なかったよね、前」

父「はい（皿を交換する）」

父と母、しばし、テーブルの上のお皿を交換したり移動させながら食べたり飲んだりがちやがちやする。

息子、一向に動かない。

両親は食べながら時々息子の襟をなおしたり、口元をハンカチでぬぐったりと手慣れたケアする。

息子になんらかの障害があることがわかってくる。

父「このあとどうする？」

母「うちに帰って片づけ、とか？」

父「そうか。いない方がいい？」

母「うーん、あの棚どうしようかと思って。」

父「え？」

母「そしたら、お母さんのてすりとか、つけられるでしょ」

父「リビングいく？」

母「うん」

息子動かない。

母、立ち上がってトレーを下げ台に3人分持っていく。

父が息子の腕を支えて立ち上がらせる。

息子、反応がない。ようにみえる。

父、車まで息子を連れていく。

車に座る家族3人。息子、何かにうなずいている。

後部座席に息子。助手席に母。運転席に父。

父、車のキーをかけエンジンを動かし、走り出す。

窓の外の風景が流れる。

息子、横の窓から外を見て時々うなずく。

母「このままりビングいっちゃおうか。」

父「そう、だね。車でまってるよ」

母「なんか買うものある？」

父「クリーニング、引き取ってきて。」

信号で車が止まる。

父、ポケットの財布からクリーニング屋の領収書を渡す。

母「はい、どれぐらい？」

言いながら領収書を見る。

父「えっと、ワイシャツ5枚、だったかな。」

母「まあ、持てるか。電話する。」

父「はい」

車、走り去る。

●大学

浩人、指をピッとやってドアに入る。

学生が廊下の向こうから段ボールをもって歩いてくる。

学生「こんにちは」

浩人「おつかれさま。その荷物は？」

学生「研究、中止になったんです。」

浩人「あ、そう。どうして。」

学生「ひとり、学生が倒れて運ばれちゃったんです。やっぱりあれやってると、私もそうだったけど、ちょっと危ないと思うんです。整理つかなくなって、境目がなくなるみたいな感じで」

浩人「そう、(学生が段ボールを落としそうになる) あ、大丈夫？」

学生「すみません」

浩人「じゃ、また」

学生「失礼します」

学生が去るのを見ている浩人、携帯を取り出し、かける。つながらない。

同僚がやってくる。

同僚「行きますよ、そろそろ」

浩人「あ、そうね。コンビニよりたい」

同僚「えー、じゃ、行きながらで」

●国道沿いのコンビニ

店員が棚に商品を並べる作業とレジの作業を並行して行っている。

車でやってくる二人。

同僚「ここでいいですか？」

浩人「ああ。はい」

走ってきた車を止めて、降りる浩人と同僚。

自動ドアを入り、ばらばらのルートで棚からペットボトル、野菜ジュース、おにぎり、チョコレートなどを取っていく。

レジに並ぶ。

浩人の番がくる。

店員「お次の方、どうぞー。いらっしゃいませ」

浩人「248番」

店員「こちらタッチおねがいします。ありがとうございますー。またおこしく下さい

ませー」

お金を払って、車の横でジュースを飲んで待つ。同僚が携帯を見ながら来る。

同僚「あと、50分ぐらいでつきますよ。」

浩人「道、きれいになったね。」

同僚「ええ」

浩人「運転代わるよ」

同僚「あ、じゃ」

キーを渡して、乗り込む。車、去る。

●大熊町のメガソーラー予定地

広大な整地された海沿いの土地。

浩人「相変わらず何もないな。」

同僚「こんなところにメガソーラーか。」

浩人「やっぱり来てみると思いっきり海沿いで、ばんばん汐風吹いてるし、パネル自体も塩害ですぐにだめになるんじゃないかって思っちゃうよね」

同僚「ええ」

浩人「けど、モジュールと接続については開発助成金おりそうなんですよ」

同僚「ええ、すごいことになりますよ、実現したら」

浩人「この土地の利用、このあと宅地にするわけにもいかないし、そういうことやって使っていくことになんでしょう」

同僚「あとで東京の方にまた連絡取ってみますよ」

浩人「送電のライン、確認してみよう。この辺のインフラは一度死んでるから、逆に今は効率よくなってるはず」

車の方に向かって歩き出す2人。

浩人「仮に今の出力のパネル、ここに置いたら、どれぐらいいけるの？」

同僚、図面を確認しながら

同僚「南側の海岸だけでも4千キロワットはいけます。」

浩人「テナントビル1個分どころじゃないね。余っちゃうよ」笑う。

理が1キロぐらい先で三脚にビデオカメラをのせている。

同僚「あれ、情報工学の？」

浩人「あ、ほんとだ」

同僚「どうやって入ったのかな、あんなところまで。作業中、みたいですね」

浩人「ええ」

理、カメラの横に立って、レンズと同じ方向を見ている。

2人、車に乗る。

去る。

理、残る。

おわり